

主催者挨拶

——シンポジウムの開会に際して——

学長 佐伯 弘治



開会に先立ちまして、一言ご挨拶申し上げます。

本日は、このように大勢の方々をご参加くださいましたことに対し、衷心より厚く御礼申し上げます。この会場は350人が定員だそうなのですが、私どもが、この企画を発表いたしましたところ、即日、次々と参加のお申込みがあつて、その数が800名にも達しました。そこで思案の挙句、結局、今回は、後部のほうのテーブルをはずして椅子だけにし、450名の先着順で切り抜けることにいたしました。この間、多くの方々のご希望に添えず、結果としてご迷惑をおかけすることになってしまいましたことを、まことに心苦しく、また、申し訳なく存ずる次第であります。

それでは、始めに、今なぜ、このようなタイトルのシンポジウムか、について若干述べさせていただきます。今さら申し上げるまでもなく、現代はIT革命の時代だと言われます。世界中どこまでもネットが張りめぐらされておりまして、われわれは居ながらにして世界中の情報を手にすることができます。そして、製造業者や一般消費者が原材料や部品、あるいは商品を手に入れようとするれば、自在に合理的な価格の物情報を把握することができるわけであります。しかし、それはそういうリーズナブルな価格の部品があるということの情報を把握することができるということだけであつて、それを需要者の元に、誰が如何に合理的な手間と方法で、いつまでに届けるかについては必ずしも十分に論議されておられません。

私は、ツールとしてのITの普及が、本当に人類の生活を豊かにするには、物流の合理化がこれに伴わなければならないものと考えます。わが国政府のIT普及政策は確かに時宜に適ったものではあります。同時に、これに即した適宜な物流改革プランがなければ、まさにそれは画龍点睛を欠くであります。

私の郷里には、「山で木を貰ったようなものだ」という言葉があります。これが全国的に通用する言葉か、どうかについては詳らかにしませんが、要するに、山でどんな高価な木を貰っても、下まで運ぶ手立てがなければどうしようもない。何の値打ちもない、ということでもあります。IT革命が単に情報の伝播にとどまるならば、それはまさに山

で木を貫つたに等しいことになります。その意味合いから、私は、学問的にも、また企業の現場においても、物流の合理化、輸送の近代化について今日ほど真剣に、腰を据えて取り組まなければならない時代は、かつてなかったのではなからうかと思っております。

ついで、流通経済大学が物流のシンポジウムを開催するに至った所以について申し上げます。

本学は1965年、昭和40年の創立であります。財団法人小運送協会、現在は利用運送振興会と称しております団体の出捐によってできました。大学の設置者である学校法人名は日通学園であります。

設立の経緯からもおわかりいただけると思いますが、本学は、物流の研究と教育、そして産学協同を特色にして出発した大学であります。ただ、開学当初から70年代、80年代前半までは産学協同が目の仇にされるような時代でありましたので、いわば波瀾の船出でありました。しかし、私たちは初心を枉げることなく、営々と旗印を護ってまいりました。その流れからいたしますと、まさに、今こそ本学の出番だと、いうべきところかと思えます。

卒業生も優に2万人を越しますが、その7割近くがわが国各地の物流企業に散っており、今、中堅幹部として活躍しております。現在は大学の規模も大きくなり、学生数が増えましたので、必ずしも物流業志向ばかりではありませんが、その伝統は脈々と受け継がれております。なお、大学としての流通経済大学の創立は、今申しました通り1965年ですが、これには淵源がございまして、突然、大学が出現したわけではありません。1940年、昭和15年、東京の神田和泉町に小運送教習所というわが国初の物流の専門教育機関が誕生しております。先に申しました財団法人小運送協会の設置したもので、旧制中等学校卒業後、修業年限1年、学生数約150名、当時のカリキュラムを見ますと、一般教養科目に哲学、歴史学、文学、もちろん専門科目としては法律科目や経済、商学関係科目が揃っておりました。一般の学校のように長期の休みがなく、盆と正月に4、5日ぐらいしか休まなかったようでありますから、1年の間に、今の短期大学程度の学習をしていたものと推察されます。

その卒業生は、いずれもわが国の物流分野で一時期を画した人たちであります。今も全国各地にご健在で、そのお一人が現在、日通学園の理事長であられる長岡毅さんであります。長岡さんは小運送教習所の第1期生で、今も毎年、往時の同期生10数名の方々と一同に会して親交を温めていらっしゃる聞いております。

この小運送教習所が時を経て昭和40年創立の流通経済大学につながりました。

今日ここに、このようなシンポジウムを開きましたのは、本学の生い立ち、そしてそ

の社会的使命、さらにまた21世紀に向かう本学の姿勢を内外に問うためであります。折しも今年是小運送教習所の生誕60年、本学もその淵源にまで遡れば、今年が創建60周年に当たります。今日の催しには、このような原点を振り返って使命をあらたにしようとの思いがこめられているのであります。

本日の催しには、基調講演者として日本ロジスティクスシステム協会会長の佐藤文夫東芝相談役、パネリストとしては石田晴久東大名誉教授、吉野源太郎日本経済新聞論説委員、井手高吉日本通運取締役、松林正一郎三井物産、食料本部リテール室長にお願いいたしました。皆様、たいへんご多用なお立場にあられるにもかかわらず、快くお引き受けくださいました。ここにあらためて感謝申し上げます。

また、運輸省がこの企画を後援して下さいました。聞くところによりますと、運輸省は個別の大学のこの種の催しを今まで後援したことは1度もないそうであります。運輸省は中央省庁の再編で間もなくその名称が消えます。したがって、50有余年のわが国運輸省の歴史の中で、1大学のこの種の催しを後援したというのは、これが初めて終りになるということかと思えます。さらに日本経済新聞社も力を貸して下さいました。また、皆さんのお手元に配りました資料にもございますように、日本物流団体連合会、全日本トラック協会、そして日本倉庫協会、全国通運連盟、航空貨物運送協会、日本貨物運送協同組合連合会の6団体がバックアップしてくださっております。心から御礼申し上げます。

なお、限られた時間でございますので、折角、全国各地からのお集まりでございますけれども、皆さんに十分ご納得いただけるまで、ご議論を深めていただくわけにはまいらないのではなかろうかと、今から案じております。お陰様で本日はこのように盛況でございますので、本学としてはこれに力を得て、でき得ればこれからもこのような機会をもつよう努めたいと考えております。

これをもって私の開会の辞とさせていただきます。